

## 土田杏村宛高倉輝書簡

山野 晴雄

この土田杏村に宛てられた9通の高倉輝の書簡は、土田寛氏が保存されていたものである。京大嘱託時代から長野県に移住した時期のタカクラを知ることができる史料となっている。

① 1919年11月30日

消印 大正8年11月30日

市内上御霊前 土田茂学兄 侍史

清水新道一八〇 高倉輝

御手紙有りがたく拝読仕申候 御病気の由 初めて承知愕入申候 御静養深く祈入申候  
文化の旨何より愉快に存申候 実是我々の相談いたし居候ひし雑誌も成或は文化と名付け  
るかも知れぬ事に相成居候て 偶然の一致に愕入候 (文化は厨川氏の意見にて) 然し是  
非ともこの方は続けて行き度しと存候 以就御援助一深願入候

我等新年早々或は拙作戯曲参るやも計られず御批判願上候 何より御養生第一と存申候  
何れ訪問他日にゆくり申候

草々

十一月卅日

高倉輝

土田 学兄

② 1920年3月1日

消印 大正9年3月1日

明石市当津二番町三〇〇番地 土田杏村学兄

京都聖護院 山王丹後御家 高倉輝

御手紙有りがたく拝見しました

雑誌の件御推察の通りです

御申越被下候件誠に絶好であると存じます

一同に話してしっかり相談して見ます

厨川氏は今東上中で十月三日中には帰宅の筈です

御病気快方の赴何よりです 宇治の会大成功 遂に大部分宿泊徹宵現文壇不満の鬱憤を  
発しました そして朝日の関口君もこれからそのつもりで創作するので同じ朝日の春山君あ  
たりが大に力を入れる事になって 是非とも関西に一旗あげる事に決めました 今の楽屋  
落文学を何でも打倒さなくちゃと言ふ所で夜が明けて了ひました

何しろ顔をそろへて一つ今度はやり度いものです 山口先生は昨冬より危篤此処の大学病

院に入院 此の一日如何かと思はれる情態ですから 遺憾ながら貴意に添ふ事が出来ません

何分にも御自愛を祈ります

御返事まで

草々  
高倉輝

杏村学兄

小生は今の計画では創作以前は此年の暮れ頃に「近代露西亜文学研究」とでも言ふ題で芸文にのせた様な評伝を十ばかり集める積りです これは多分岩波から出す事に成りませう  
その他は創作に専念です 不一

③ 1923年1月22日

消印 大正12年1月24日

京都市上京区新町頭 土田杏村兄

沓掛 高倉輝

今朝六時前帰って来た 随分疲れた

原町へ行くにはよほど汽車を考へて行かぬと勞びれる 君が行く時には前に都合の好いのを通知する 講義はとに角六十余の聴衆が最後まで残ったから成功だ だが教師ばかり多くて何だか教育会の講習のやうな気持がしたが(聴衆の方にも其の気で来たものも多かった) 併しだんだん老先生が中心だから駆逐せられて若い連中が中心になる傾向だけは強めて来た 主催者田口は実に快男子だ どうか旨く成功さし度い 無線電信六百六十呎の頂きの方から小さく見える針金の上で作業をして居る所には全く驚嘆して了った それ位上の軽業は無い(最も滅多に見られぬさうだ偶然今度見た)

作早速かかる 出来てからどこへでも出す所を考へる 新小説が突然変な態度をして意がいだったが やっと今分かった あすこから菊池一派の雑誌が出た 滑稽奮闘 お説の通り小説は日記の積り(原稿は)戯曲は社会劇を草しその迹が例の仏教脚本だ

何より御健康を大事にしてくれ 夫人によろしく

妻は淋しがる本人と言ふ事をどこかへ落して来たやうな女だから平気で居る

二十二日

輝

杏村兄

同封のやうな会員名簿を作つて貰つた それは自由大学で作つて貰つたものだ

④ 1923年10月23日

消印 大正12年10月24日

京都市上京区新町頭 土田杏村大兄

信州別所温泉 常楽寺 高倉輝

御手紙難有う 読売や女性の件 例のとほりで近頃では却ってその度に微笑を禁じ得なくなつた（特に女性の巻末言は就中面白かつた）が 雑誌といふものは厭やなもので どうかしてもう少し本が売れて呉れて生活が大体それでやって行けるなら将来原稿をを直ぐにアルスに渡して行きたいものだと思つてる 自由大学は十二月一日ドストイエフスキイをやる事にした

ここは景色が素的に好い 家も僕などには勿体ない 住職は文学士で人の好い人だし 暫くたてこもつて 長篇（「阪」…「蒼空」の続篇、僕の京都の生活のざんげろく）を書き上げて了ふ 妻も子供も大元気（子供は信（女）とつけた） もう生後百日位の子にも珍らしいと言つて皆を愕かしてゐる 健康なのだらう 最も僕が一年の誕生日に下駄ばきで祝のもちを町内へ持って行つたと今でも親戚の噂に残つてるから それに似たのかも知れぬ 取りいそぎ御返事のみ 御自愛を捧る 御令聞へよろしく

二十三日晩

輝

杏村大兄

⑤ 1923 年 11 月 28 日

消印 大正 12 年 11 月 28 日

京都市上京区新町頭 土田杏村 大兄

信州別所 高倉輝

粉ミルク難有う 助かつた みんな病気の由 いけないね 大事にして 早く癒つてくれ 僕の方は三人とも風邪で倒れたがもう直つた

いま自由大学のドストイエフスキイのノオトを作つてる この機会に作品全部日本訳で読み返してすっかり伝記を直して了つたので大変だった しかし大きな勉強になつた 殊に貧乏な時ドストイエフスキイは薬りだ

僕のことではいろいろ御配慮難有う

いつもながら申わけなし

併し今のところ全くどうにもならぬ 他に道を捜すとしても 実際さがしやうがない位置に有るのだ 為方が無い 行く所まで行かう 作品は旨く行つてる 苦しみ苦しみぢりぢりやつてる これが力だ たつた一つの救ひの力だ もう誰一人読んで呉れなくても好いものだと言ふことが書きながら分かる

取り急ぎ御礼のみ 自由大学一日からで急がしいからいづれ迹より詳しく

二十八日

輝

杏大兄

⑥ 1924 年 2 月 9 日

消印 大正 13 年 2 月 9 日

京都上京区新町頭 土田杏村大兄  
信州別所 高倉輝

御手紙難有う とうとうやられた 疲れが一度に出たらしい そこへ風邪を引いて倒れた  
が大した事はない 直ぐ起きて為事にかかる積りだ これから十一月まで悉く行だ 所  
で八海の方が殊に困った 今月十六、七といふのだから 出君は逆もだめだ 僕から佐野  
君にさう言っただけだが これも逆もあてにならぬ そちらに誰か無いか なる可く赤く  
ない手頃の人は無いかね 全く弱った 殊に僕は渡辺君が好きで殊にああして努力して  
ゐるのだから何とか都合をつけてやりたい どうかそちらでも一つ骨を折ってくれ それか  
らもう一つお願い 今僕の周囲に大分勉強する語学の堪能な連中がゐる 大部分語学校出  
で東大や京大を途中でよして一人こつこつやってるのか多い 英、仏、独、露悉くゐる  
この連中哲学や社会問題の本を読んで頻りに何か訳さうとしてゐるが どうも統一が無く  
てばらばらだ そこで一つこれに叢書風に纏めたら面白いと思ふのだ 将来一つ君に監修  
して貰ってやり上げたいと思ふが 今さし当ってまだ日本訳がなくてそして手頃のアウト  
リテートの本が気づいたら書きつけて置いてしらべてくれ 片っ端から先づ読んで貰って  
訳して行きたい 頼む

アルスも三月になれば大部分都合よくなるとの事だ 兄の印税も都合つき次第送らせる事  
にした 何にしても本がどんどん出るのはすばらしい 併し無理をしないやう何よりも頼  
む 文化が出たら直ぐに送ってくれないか この本屋へは来ない 僕も今年こそはいく  
らか落ちつきたい 労苦と不摂生との長い間で全く命をすりへらしたやうな気持ちがする  
いづれ迹より詳しく

九日 輝

杏兄  
令閨へよろしく

⑦ 1924年4月24日

消印 大正13年4月24日  
京都市上京区新町頭 土田杏村大兄  
信州別所 高倉輝

御手紙難有う 御令閨の御病気その後如何  
山内君の事あす行って早速伝へる  
越後の方僕は今年は種が無くて行けさうにないのと母の病気とで引きうけられまいかと思  
ってる あすにも何とかまとめて旨くして行きたいものだ  
短篇集 校正殆ど終った 戯曲集を今月末に渡すつもり 実に忙しい  
今日改造の小さな広告を新聞の端に見出した 今昔の感にたへない  
御自愛専一とりいそぎ

二十四日 輝

杏兄

⑧ 1924年4月29日

消印 大正13年4月29日

京都市上京区新町頭 土田杏村 大兄

信州別所 高倉輝

山内君の事 早速山越君に伝へた

善後策まだ極まらない 事によると今度は出来ないかも知れない いづれ迹より詳しくまた極まり次第に通知する

先日とうとう福島に石の巻の応援にかき出された 今日行ってあす帰ったんだが思ひのほか静かで一人の野次も出ずに僕のおしゃべり一時間半 例のとほりの講演風なのでどうかと心配したが やはり向うでもその積りで開いてくれた 外のは野次も出て盛んだった所を思ふと やはり我我は我我の調子を押して行きさへすれば向ふへ通じると思った 随分政治そのものの愚な事と愚だが無くてはならない所以とを喋って来た 日光へ原稿をやった 多分六月出るだらう ペンネエムだから出たらめのペンネエムではない 日光は君の所へ行ってるか 行ってなければ送らせる これは隔月ぐらゐに出るつもり

令閨の御病氣如何や精精御自愛いのる

とりいそぎ

二十九日

輝

杏兄

⑨ 1926年10月27日

消印 大正15年10月27日

京都上京区新町頭 土田杏村兄

信州別所温泉 高倉輝

高著唯今到着難有う これは実に素敵な本だ 近来かくの如き装釘は出ない 早速序文だけ目を通したが 実に澄んだ気持のする本だ 早速今晚から読み初める

文学論も早く見たいものだ 御説のとほり実際文章家で見ってくれる人は少いけれども 併し僕の考では意識しなくても名文は読者の心に響いてゐると思ふ (感想是非きかして貰ふ) その積りでお互いに文を練る事だ

僕の本も本月内位に市へ出るかと思ふ 無論思索として大したものでも何でも無いけれども難しさうな問題を易しく書いたの少し味噌だ

日日の批評まだ出ない 実に腹が立ってならない 兄に対しても唯だ申し訳けこれ無く今アルスへまたせいてやった所だ 白秋の雑誌いま来たが実に愚な雑誌だ 殊に文芸春秋式の気分と同じく毒されてゐるに至っては言語道断で ああ時流に超然たるはつくづく難しいて心から感じた 鉄雄がくれぐれも頼んで来たので僕も新年号にハ何か書く事になると思ふが この雑誌では書く気になれば アルスも白秋がガンで実際困ったものだ 今に

これも詩と音楽と同じ運命になる事うけ合ひだ  
やっと子供達が達者になってほっとした  
御令閨様へよろしく

杏兄

輝